協会ニュース　百舌鳥八幡宮				
	2017年(平成29年)	12月号(247)	川上由	初公開の百舌鳥八幡宮
	2017年(平成29年)	11月号(246)	小川正夫	百舌鳥八幡宮と大久保利通の扁額
	2018年(平成30年)	1月号(248)	小川正夫	「大久保利通日記」から読み取る（1）
	2018年(平成30年)	2月号(249)	小川正夫	「大久保利通日記」から読み取る（2）

2017年12月号(247号)

初公開の百舌鳥八幡宮

［川上 由］

「親友の税所篤に連れられてここ堺の地を訪れて、早や140いく年、私の書いた書がこんなに沢山の方々に見てもらえるとは思いませんでした。思えばあの時、板垣、木戸、伊藤、井上、岩倉、五代の各氏との近代日本へ向けての喧々諤々のさなかに、この雄大な百舌鳥古墳群の中に建つ八幡様に参って、心が洗われる心境で書いたのが、この扁額でした。

美しい浜寺の松林も、私の願いが通じて残してもらいました。(注明治6年、大久保利通が伐採されそうになった浜寺の松林を、当時の県令であった税所篤に掛け合って伐採を中止させた。)そして大阪会議(注 明治8年、大久保利通、板垣退助、木戸孝允、伊藤博文、井上馨、岩倉具視、五代友厚などの明治維新のメンバーが再度、大阪に集合して、近代日本の再構築を議論した歴史的な会議）の緊張のさなかに、安息のひとときを過ごすことができたこの堺に、どれだけ感謝しても足りない気持ちです。

そしてその気持ちを抱いて書いたこの扁額を、堺観光ボランティアの皆さんを通して、こんなに沢山の方々、遠くは東京、九州、四国、そして米国や英国、仏国の異国の方々にまで紹介して頂き、本当にありがとうございました」と大久保利通卿も思われたのではないでしょうか？

百舌鳥八幡宮と大久保利通の扁額［百舌鳥八幡宮担当ディレクター 小川 正夫］

百舌鳥八幡さんといえば、堺観光ボランティアのベテランガイドなら、一度はガイドしたことのあるお馴染みの神社ですが、今回の秋季堺文化財特別公開では、唯一の初公開スポットとして、ガイドブックの表紙に登場する目玉となっています。百舌鳥八幡宮の何が初公開なのかは、後でご説明するとして、今回の文化財特別公開の主役に百舌鳥八幡宮が選ばれた意味について考えてみましょう。

「百舌鳥八幡宮略記」によれば、百舌鳥八幡宮は、神功皇后が天下泰平のため此処に幾万年も鎮座されることを誓われ、欽明天皇の頃（６世紀)、八幡大神のご宣託により、その地を「万代（もず)」と称し創建された由緒ある神社です。八幡大神＝応神天皇を主祭神とし、そのご両親の仲哀天皇、神功皇后が共に祀られ、ご子息の仁徳天皇をお祀りする若宮社も同じ境内にあります。

応神天皇ご一族の陵墓が群立する百舌鳥・古市古墳群の古市古墳群には誉田八幡宮、百舌鳥古墳群には百舌鳥八幡宮が配されており、両八幡宮が百舌鳥・古市古墳群をお守りしているわけです。

御廟山古墳は、応神天皇を古市の誉田に埋葬する前の初葬墓ともいわれ、江戸時代には百舌鳥八幡宮の奥の院があり、社は明治時代には撤去されましたが、後円部には今もその石燈籠らしき石柱が濠越しに見られます。応神天皇陵が誉田御廟山古墳と呼ばれ、誉田八幡宮から放生橋という太鼓橋で結ばれているように、御廟山古墳の奥の院へも百舌鳥八幡宮からの参道があったのでしょう。世界遺産となり多くの人が百舌鳥古墳群を訪れる時、古墳群の中央に鎮座する百舌鳥八幡宮にもお参りして頂けるよう、我々堺観光ボランティアも新たな想いで百舌鳥八幡宮を見直し、ご案内をしていきたいものです。

さて、今回初公開となる文化財は、明治の元勲大久保利通卿が明治８年に百舌鳥八幡宮に参拝した時に残した扁額です。大久保利通は、伐採される浜寺の松を惜しみ「音に聞く 高師の浜のはま松も 世のあだ波は のがれざりけり」という歌を詠んだ「惜松碑」で堺に足跡を残していますが、それは明治６年のことです。明治８年２月11日、大久保利通が、板垣退助、木戸孝允、伊藤博文、井上馨と大阪の料亭「加賀伊（現花外楼)」に会し、立憲政治への道を開いた「大阪会議」が開かれており、利通は五代友厚邸に１月から２月の２カ月ほど滞在していますが、その間に百舌鳥古墳群を訪れ、百舌鳥八幡宮にも参拝したことを示す貴重な文化財です。

「大久保利通日記」から読み取る 大久保利通、税所篤そして堺 その１

秋の堺文化財特別公開も無事終了しましたが、百舌鳥八幡宮で初公開された大久保利通卿の扁額は大変好評で、ご覧になった方々は、明治の元勲大久保利通が堺と関係があったことに驚かれていました。堺に大久保を引き寄せたのは堺県２代目県令の税所篤ですが、この二人と堺の関係を、時代背景とともに「大久保利通日記」から詳細に拾ってみたいと思います。

税所篤の堺県令就任の年の明治４年５月５日に長州へ出張する途上、大阪に立寄った大久保を税所が迎え、同じ宿に泊まり、翌日大阪の写真所で写真を撮ったということが、大久保日記に記録されています。

新政府を樹立したとはいえ、政府の直轄領といえるのは、徳川家から没収した天領、旗本領だけで、大名領は版籍奉還により「藩」となりますが、大名が統治する領地のままでした。その数少ない直轄領を「県」としてその知事である「県令」を任命します。

大阪の南の摂津・河内・和泉に跨る巨大で重要なエリアを「堺県」とし、その初代県令に豊後岡藩士で寺田屋事件でも活躍した勤王の志士であった小河一敏を抜擢しました。しかし、小河は大和川氾濫で困窮する人民を助けるために、政府の意向を無視し独断で県札を発行します。新政府の中央集権体制を固める為、藩をも政府直轄領とすべく、廃藩置県という荒療治を進めようとしていた大久保利通は、政府の任命した県令であるのにもかかわらず政府方針に従わない小河をすぐさま更迭します。その後任として、西郷隆盛と共に薩摩の盟友であり、倒幕の同志であった税所篤に後を託したわけで、その新県令の門出を祝う記念写真とも言うべきものが右の写真です。税所はこの後 10 年間、堺県が消滅するまで県令として堺に住み、大久保は機会あるたびに税所邸を訪れることになります。

左：税所 篤 右：大久保利通

堺に残る最初の大久保の足跡は、皆さんご存知の浜寺公園にある「惜松碑」です。「明治 6 年夏」と税所篤が裏書していますが、残念なことに、この時期の大久保の日記の記録は残っていません。明治 4 年 11 月 12 日に岩倉具視、木戸孝允、伊藤博文など政府首脳と留学生を含む総勢 107 名の岩倉使節団の副使として大久保は渡欧米しており、出発前の 11 月 10 日までの日記と、渡欧中の手紙に添付された翌年 1 月 5 日までの記述以降、明治 6 年 10 月 14 日までのほぼ 2 年間の記録は日記に収録されていません。渡欧米中の記録が存在しないのは、やむを得ないとしても、帰国してから 5 ヶ月間の記録が無いのは何故でしょうか？

西郷隆盛に後を託した留守政府で征韓論が沸騰し、朝鮮征伐の方針が決定されるという政局の展開を聞いた大久保利通は、明治 6 年 5 月 2 日には視察団を離れ急遽帰国しています。戦端を開く為、西郷隆盛を朝鮮使節として派遣することが決定され、天皇への奏上を待つだけという状況を見た大久保は、単身火中に飛び込むことを不利と見て、病気と称して雲隠れをした、というのが司馬遼太郎の見解です。

大久保利通は、身を潜め、7 月になると病気静養を理由に東京を離れ、富士山に登ったり、近畿に入り、近江、和泉、紀州を周遊し、鉄砲猟を楽しんだりしています。「惜松碑」の裏面には、「明治三十一年十月 子爵 税所篤」の撰文があり、その大意は概ね次のようです。「これは古し、明治六年夏の夕方、大久保利通の君と高師の濱見んとて、宿を出て浜の石に腰かけ、四方の景色を見渡すほどに、松の林を半ば切りたるを見て、『いかなる故にか』と言われたので『近き頃士族授産の為にとて、払い下げたるなり』と答えると、『そはけしかることかな、かかる名所の松の幾百歳経たらんを悉く　切り払はんは、まことに情け無きわざなり。ここの司ともあるものの心なし』、と言われ、紙を取りだして書かれたる歌也・・略・・・」税所県令は、大久保の意思を尊重し伐採を止めさせ、同年 1 月に発布されていた公園整備の太政官令による日本で最初の公園の一つとして浜寺公園を開設しました。

大久保は、この後 9 月 13 日に岩倉使節が帰国するや否や、岩倉とともに征韓決議をひっくり返す大逆転劇を演ずるの

ですが、大久保日記には、10 月 15 日から記録が再開されています。それによれば、西郷をはじめとする征韓論擁護派も岩倉・大久保の反対派もともに辞職を賭して対決し、新政府が瓦解の危機にあったこと、両派から突き上げられた太政大臣の三条実美が病気で倒れてしまい、結果として征韓論がつぶされるという、司馬遼太郎の小説で語られたドラマを裏付ける記述が残されています。征韓論をひっくり返す為の戦術的雲隠れの時期の日記の空白の時期、大久保は堺を訪れていたのでした

「大久保利通日記」から読み取る大久保利通、税所篤そして堺その２

さて、「惜松碑」の次の堺訪問の証しが「百舌鳥八幡宮の扁額」ですが、その裏面には、内務卿全権弁理大臣大久保利通卿御筆堺県令従五位税所篤殿御寄付明治八年二月百舌鳥櫻井両社祀官端森英雄と記されてあり、大久保の「百舌鳥神社」の揮毫を税所が扁額として百舌鳥八幡宮に寄付したことがわかります。大久保の揮毫が為された明治８年の頃の時代背景を観てみましょう。征韓論をめぐる政争で反対派を一掃した大久保は、国政の全権を掌握するために、強力な権限を有する内務省という新たな機関を設立し、内務卿として新政府のかじ取り役となり辣腕をふるいます。「全権弁理大臣」というのは、外国との交渉で全権委任された特命大臣ということですが、それは、「台湾出兵」の事後処理として清国との外交交渉のため派遣された時に与えられた役職です。

征韓論政争では、あれほど外征より内政の充実を主張した大久保が、日本の漂流民（琉球人）が、現地人に略奪殺害された事件の台湾紛争では、一転して征討軍の派遣を決めます。その為に征韓論政争で協力しあった木戸孝允は、西郷と同じく政府を去り、長州に引きこもってしまうことになりますが、そこまでして台湾に出兵したのは、朝鮮の宗主国である眠れるライオンの清と、朝鮮を狙う大国ロシアという両雄との衝突の危険性のある朝鮮出兵ではなく、清国の統治の及ばない台湾なら組し易いという大久保の政治家としての怜悧（れいり＝さとい）な計算があったのでしょう。

成立して間もない明治政府は、初めての海外出兵を強行し、難なく原住民を制圧しますが、鎖国から目覚めたばかりの小国の軍事行動に対し、清国は強く反発し、台湾からの即時撤兵を要求します。この外交交渉の代表として明治７年８月に全権を担って大久保が清国に乗り込み、決裂の危機もあった難しい交渉の結果、賠償金５万両の支払いを清に認めさせ、11 月末に帰国しました。交渉に於いて、台湾原住民を化外の民（文化の外、中華文化の及ばない野蛮人）として責任を認めなかった清国の態度が、後の日本の台湾領有に繋がっていくわけで、外交としては大勝利と言えるでしょう。

不平士族を救うために自らの命を捨ててまでも、朝鮮に侵攻しようとした心情家の西郷どん、内治優先で海外派兵にあくまで反対した理性家の木戸と比べ、したたかな現実家としての大久保の違いが現れています。

凱旋した大久保は、明治天皇からは賞賛され、国中の歓呼で迎えられましたが、税所も上京し、大久保に祝杯をあげています。現実家大久保は、祝杯の美酒に溺れることなく、木戸の政府復帰の為の工作にすぐさま取りかかり、岩倉具視や木戸と同じ長州人の伊藤博文と談合、祝いに駆け付けた税所篤もその談合に参加したことが日記に記録されています。伊藤に木戸との会談の斡旋を依頼した大久保は、朝廷には温泉で静養する旨届出、清国から帰国して一月足らずの 12 月 24 日に東京を出てひとまず大阪に向かいます。世に言われる「大阪会議」の始まりで、この最中に大久保と堺の２度目の出会いがあり、「百舌鳥八幡宮の扁額」へと繋がっていくのです。